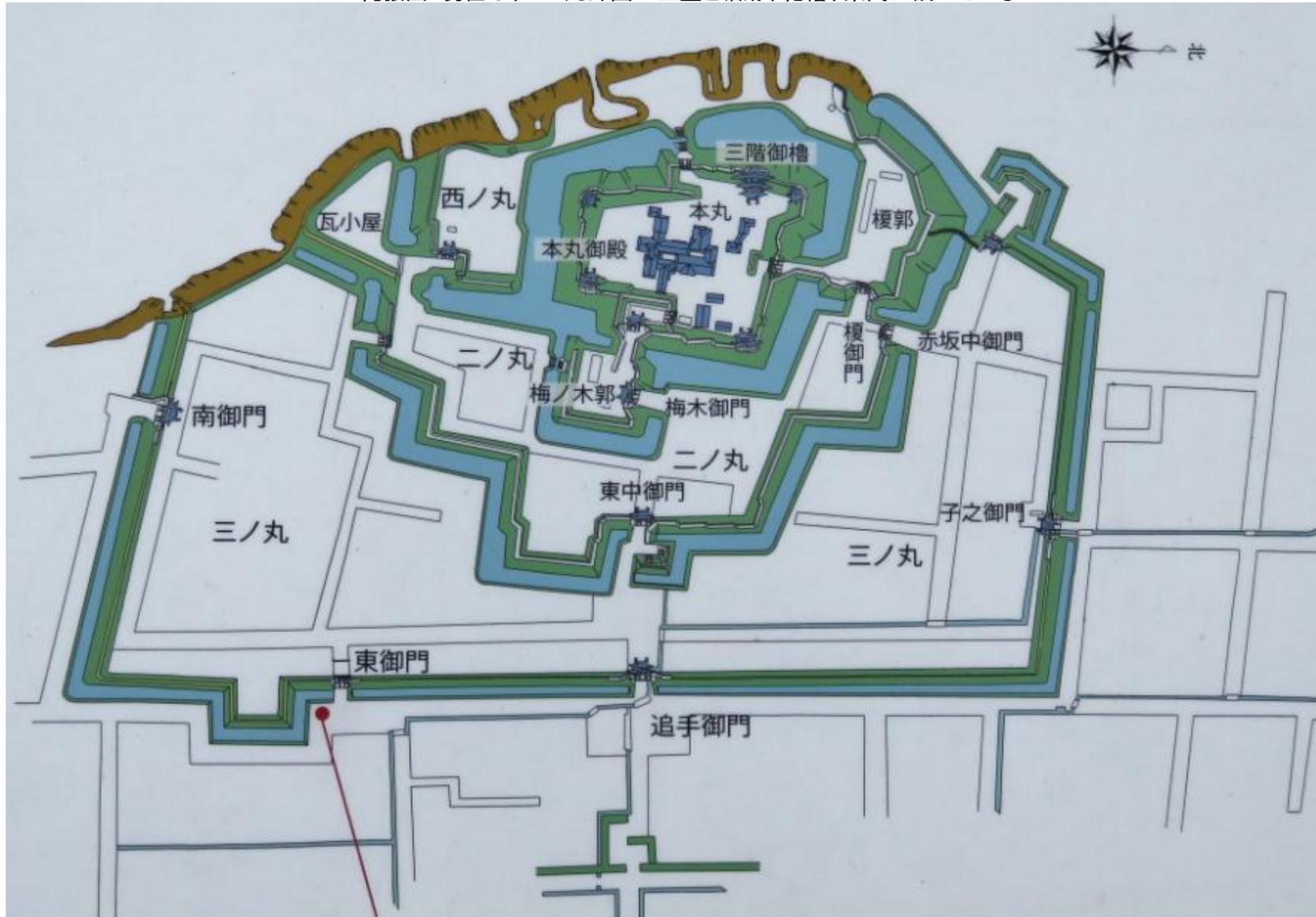


高崎城跡(高崎市)

築城年代: 慶長2年(1597年)、築城者: 井伊直政

縄張図/現在は、三ノ丸外圍の土塁と堀跡、乾櫓、東門が残っている



この辺は追手御門辺りか/堀跡が前方に残っている/北方向を見たところ



こんな塩梅/腰巻石垣が続いている



振り返って見たところ/右手は乾櫓



その先に堀跡が続いている



移築復元された乾櫓



乾櫓と移築された本丸東門



東門は本来は本丸の東側にあったと云う/高崎市指定重要文化財/左手に説明板が立っている



くぐり戸が付いた通用門として使われていた

高崎城東門の由来

高崎城十六の城門中、本丸門(雀門)刎橋門、東門は平屋門であった。そのうちくぐり戸がついていたのは東門だけで通用門として使われていた。

この門は寛政十年正月(一七九八年)と天保十四年十二月(一八四三年)の二度、火災により焼失し、現在のようにならざるに建て直されたものと考えられる。門は築城当初のものよりかなり低くなっている。門は築城当初のものよりかなり低くなっている。門は築城当初のものよりかなり低くなっている。門は築城当初のものよりかなり低くなっている。

この門は明治のはじめ、当時名主であった梅山氏方に払い上げられ、市内下小鳥町の梅山大作氏方の門となっていた。創立十周年記念事業としてこれを梅山氏よりゆずりうけ、復元移築し、昭和五十五年二月、市に寄贈したものである。

昭和五十五年三月

高崎市教育委員会



元は鎌倉時代初期に和田義盛の一族とされる和田正信が初めて築城したものと云う





側面から見た東門



東門の背面/右手に説明坂が立っている



高崎城乾櫓の由来

この櫓は、高崎城本丸乾（西北）の土圍上にあつた。南に建つ三重の天守閣（御櫓と呼ぶ）と並んで、本丸堀の水に影を投じた姿がしのばれる。

高崎藩に伝えられた「高崎城大意」という書物によれば「もとこの櫓こけらふきにて櫓作りになし二階もなく土蔵などの如くなるを先の城主腰屋根をつけ櫓に取り立て」とある。先の城主安藤重博が今のように改築したとある。従つて、重博在城の元禄八年（一六九五年）より以前から存在したことが明らかである。多分、安藤重長が城主であつた寛永の頃の建築であらう。城郭建築物の木具内に現存するものはこの櫓只一つである。

幸にこれが保存されていたのは、明治初年に払い下げられ下小鳥町の梅山氏方に移り、納屋に用いられていたからである。所有者の梅山太平氏が市に寄附の意を表され、県の指定文化財となつたのは昭和四十九年で以来二年を経て漸くこの位置に復元することができた。元位置はここから西方三〇〇mの地点に当る。

屋根の「しやちほこ」は栗崎町の五十嵐重五郎氏宅に現存するもと高崎城のものを模造したものである。

また堀は金古町の天田義英氏宅にある高崎城から移した堀にならつて作り、瓦は大部分を下滝町の天田季近氏方に保存されていた高崎城のものを寄附されたものである。高崎城には石垣はほとんどなかった。この石垣は土圍敷が広面積を占めないよう止むを得づ築いたもので、乾櫓には土圍上に一m足らずの高石台があつたに過ぎない。

昭和五十二年五月

高崎市教育委員会

その右上を見たところ/手前に標柱が立っている/「群馬県指定重要文化財 高崎城乾櫓」と記されている



乾櫓へ進む



これが本丸の御三階櫓に続く墨上にあった乾櫓/説明坂が立っている



群馬県指定重要文化財

高崎城乾櫓

高崎城の本丸は、烏川の縁りに近いところ（現在の日本たばこ産業倉庫、NTT別館付近）に土塁と堀をめぐらし、その四隅に、西側の土塁の中央に建てられた三層（三階建て）の櫓を取り囲むように四棟の隅櫓を配していた。その乾（北西）の角にあったのがこの櫓である。

二層（二階建て）で、本瓦葺き入母屋造りの屋根をのせ、腰屋根をめぐらした平入りの建物であり、梁間二間（十二尺）桁行三間

（十八尺）の規模である。外壁は柱を塗り込めた大壁で、白漆喰で仕上げている。現状は、初層（一階）の西壁（当時とは方位は逆）中央（中の間）に土戸を引く戸口を設け、初層のこの壁以外の三面と二層の四面には、それぞれ太い堅格子をはめた窓を二カ所ずつあけている。ところが、明治六（一八七三）年に、城内に置かれた東京鎮台高崎分営（十五連隊の前身）を撮影した写真では、初層の正面（東壁）右の間に戸口があり、左の間には同様な窓一カ所が認められる。妻飾りは狐格子で、破風板に懸魚をかけている。

高崎城の築城は、慶長三（一五九八）年、井伊直政によって着手されるが、その後、藩主は目まぐるしく替わり、元和五（一六一九）年に安藤重信が入部して、元禄八（一六九五）年まで三代にわたって在城し、城と城下町の整備にあたっている。享保（一七一六〜一七三六）ころの著作という「高崎城大意」には、三代の重博が、平屋の土蔵の様でしかなかった乾櫓を二層の櫓に改築したとの記事があるが、これと様式的に見ても矛盾はなく、十七世紀末の建築と推定されている。その後、東門とともに下小鳥町の農家に払い下げられ納屋として利用されていたが、県重要文化財の指定にともなって、昭和五十四年この位置に移築復元された。初層の戸口の位置は納屋として使用されていた時期を踏襲しており、屋根瓦は当時の資料によって復元されたものである。両側の鉄砲狭間をあげた塗り込め塀は、修景のためのものである。



正面図



側面図

指定年月日 昭和四十九年九月六日

群馬県教育委員会
高崎市教育委員会

17世紀末の建築と推定されている

右手は土塁の上/堀跡とともに南方向に続いている/右手は三ノ丸のエリア



土塁上を南方向に進む



これは三ノ丸エリアから土塁を見たところ



土塁の右手には堀跡が沿っている



ここで土塁が寸断されている



そこから今来た方向を見たところ/右手が土塁、左手が三ノ丸のエリア



土塁の右手に行って、堀跡を見たところ/左手が土塁



土塁が寸断された先(南方向)を見たところ/この先からまた土塁が続いている



そこで右手を見ると、これが三ノ丸のエリアに建つ高崎市役所



右手の土塁の先を見よう



堀跡とともに左手に折れている



こんな感じでこの部分だけ三ノ丸エリアから出っ張っている/これは凸型の防衛施設である出柵/横矢掛りとなっている



その出樹の周りを廻ってみよう/前方が凸型部分



いわゆる横矢の張り出し部分で、この先で右手に折れている



右手に折れた先で振り返って見たところ/ここで左手に折れている



高崎城の由来

高崎城は徳川四天王の一人である井伊直政によって築られました。天正18年（1590）に箕輪城（市内箕郷町）12万石に配置され直政は、新しい徳川体制に相応する場所に居城を移すため、慶長3年（1598）に所領であった西毛地方の中からこの地を選び、地名を和田から高崎と改め、城の名称も高崎城と名付けました。

井伊直政は2年後に佐和山城（滋賀県彦根市）18万石へ転封になってしまい、その後、高崎城主は短い期間で交代したため築城工事は中断されていましたが、安藤重博が工事を再開し元禄5年（1692）に完成しました。

城郭は、烏川の深い淵と高い崖という天然の要害（地図の上部）を背に、前面に開けた広大な平地を活用して縄張りが行なわれ、本丸、二ノ丸、三ノ丸を土居と堀で囲んだ輪郭梯格式の平城です。

本丸の土居の上には天守に相当する御三階櫓と二層の隅櫓が4基設けられ、約5万1600坪の広さは10万石格の城郭と言えます。城内の3分の2を三ノ丸が占めていること、一番外側の三ノ丸堀と土居が矩形で直線的であること、その堀と土居に凸型の防衛施設である出柵（現在地）が設けられていることなどがこの城の特徴です。

明治時代に入ると陸軍省の管轄となり、城内は第十五連隊の兵営として殆どの施設は取り壊されてしまいました。しかし、三ノ丸の土居と堀は、ほぼ昔のままの姿で残り、その他の遺構として乾櫓と御殿表御門（いずれも音楽センター東に復元移築）があります。

さて、土塁は南側に続き、この先に三ノ丸エリアへの入口が見える



ここが南側の虎口/南側から見たところ



そこで右手の堀跡を見たところ



同じく左手の堀跡を見たところ



右手の土塁下に標柱と説明板が立っている





高崎市指定史跡

たか さき じょう し

さんのまるそとがこいのどい とほり

高崎城址

(三の丸外圍の土居と堀)

Takasakijyoushi

箕輪城主井伊直政が徳川家康の命により、この地に城を築き箕輪より移転したのは慶長三年（一五九八）のことであった。築城にあたって直政は、当時和田と呼ばれていたこの地の地名を松力崎と改めようとし、竜広寺の住持白菴に相談した。白菴は、諸木には栄枯があることを説き「成功高大」の意味から高崎と名づけるように進言し、これが採用された。「高崎」の地名はこうして誕生したといわれる（川野辺寛『高崎志』）。

この地にはかつて和田氏により和田城が築かれていた。直政により新たに築かれた高崎城は、和田城址を取り込む形で築かれたといわれており、坪数五万一六一三坪にも及ぶ広大な城郭となった（土屋老平『更正高崎旧事記』）。築城にあわせ、城下町の整備も開始され箕輪城下から多くの寺院や町が移された。連雀町や田町はこのとき箕輪より移転した町である。また、城下町を囲む形で遠構と呼ばれる土塁と堀も築かれた。

明治四年（一八七二）の廢藩置県後、高崎城の敷地は兵部省、次いで陸軍省の管轄となり、乾櫓をはじめとする多くの建物が払い下げとなった。

さらに、兵営や練兵場を建設するために城内は整地された。このため本丸や二の丸の土塁や堀は現存しておらず、三の丸の堀と土塁がわずかに昔の面影を止めている。



文化14年「御城御土居通御植物木尺附絵図」
(群馬県指定重要文化財 櫻井家旧蔵「高崎城絵図並びに文書」より)

所在地 高崎市高松町五一八ほか
指定年月日 昭和五七年二月一七日
平成二三年一〇月三十一日設置

高崎市教育委員会

左手の土塁を見たところ



三ノ丸のエリアに入って振り返って見たところ



左手の土塁を見たところ



右手の土塁を見たところ



そこで振り返って三ノ丸のエリアを見たところ/城址公園となっている



右手の土塁を見たところ



さて、ここは最初の乾櫓のすぐ北側にある一寸した広場/高崎城跡関連行事のための施設のような/前方に文字が記されている





史跡

高崎城址

高崎市長 住谷啓三郎書

説明書きもあった



高崎は王朝時代赤坂の荘と称し、東山道に属し、いたかこの地方の中心地とまでにはいついなかつた。

十三世紀 鎌倉時代和田氏が城を築き、ここに居るに及ん、いよやく地方の中心的存在となり、十六世紀の末期、天正十八年、小田原の北條氏と運命をともにするに至るまで、和田城は三百数十年の歴史を誇つた。

慶長三年、井伊直政が箕輪城十二万石の城主から移つ、城主となるに及ん、和田の地を高崎と改めた。成功高次の義である。この時代、城地の規模を拡張し、中仙道第一の壮大さは、交通の要衝たることと相伴なつて、要害の名をうたわれた。中仙道は、うち中山道と改称された。

後、酒井安藤ら数代の城主を経て、大河内氏十代の居城となり、明治維新王政復古により、虎城となつた。大河内氏は初代城主輝貞から第十代輝盛に至るまで、幕政時代にはあるが、文治の城主となつた。

明治六年、東京鎮台高崎分營を設置し、旧城内は兵營となつた。ついで、明治十七年、歩兵第十五聯隊が創設され、明治二十年八月、大平洋戦争の終焉まで、高崎は六十余年間、軍都の親と三した。その間、大小の戦役に及んだ。

特に大平洋戦争には、東部第三十八師隊となり、歩兵第百十五聯隊をはじめ、大小あまた部隊の基幹部隊をなした。源社奉公、国家護持のために散華の郷土出身精兵は、実に五万、兵どもが夢の跡とつた。つた古人の名句が傳はれる。

昭和二十年八月十五日、戦い終り、平和はよみがえつた。われらは永遠に、戦争放棄の民として更生し、城内は市の行政、教育、文化の中心、機關所在地となり、市民生活の中心となつた。

ここに明治百年を迎え、高崎城回顧の記を録する。

石垣も積まれていて、それなりの雰囲気漂う



参考ホームページ

<http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/010gunma/100takasaki/takasaki.html>

<http://umoretakojo.jp/Shiro/Kantou/Gunma/Takasaki/index.htm>

<http://www.gunma-navi.net/10202014.html>

<http://vogokun.my.coocan.jp/gunma/takasakisi.htm>

<https://4travel.jp/travelogue/11256729>

<http://www.geocities.jp/bane2161/takasakijyou.htm>

<http://www.siromegu.com/castle/gunma/takasaki/takasaki.htm>

<http://www13.plala.or.jp/gunmanotabi/kp-takasakijyou.html>

<http://www.takakurashoten.sakura.ne.jp/castle/kantou/takasakijyo.htm>

